SCR Press
Student Counseling Room Press
Vol. 19 2021.12.1. 日本工業大学学生相談室

大学生を卒業すると社会人になると言われます。なにかそこから先は「おとな」です、という響きがあり、年齢や立場で自動的に「おとな」ができあがるみたいです。しかし、実際は社会人の期間が 40 年以上もあるわけです。この間、何も変わらないと考える方が、むしろ不自然でしょう。ここには、子どもから見た「おとな」と、実際の「おとな」の違いが関係していそうです。

おとなになったつもり

「できあがったおとな」というのは、子どもから見た「おとな」イメージです。小さい頃、親のことをなんでもできると思っていた人も少なくないでしょう。

でも実際には社会人になってもなんでもできるわけではありませんから、このイメージのままだと、いつまでも「おとな」になれていないようで不安になります。そこで、社会人になった、昇進した、結婚した etc.と何かの基準を持ってきて、だからもう「おとな」だと自分を安心させたくなるかもしれません。

しかし、「～～ができたらおとな」という発想自体が、「できあがったおとな」の延長です。これでは、「おとなになったつもり」の子どもでしょう。

「おとな」とは「おとな」への永遠の憧れ

私たちは成長するにしたがって、親も世間の大人たちも、万能ではないと知ります。しかし、それで心の中の「理想のおとな」イメージが消滅してしまうわけではありません。むしろ、「理想のおとな」が現実の大人たちから離れることで、心の中で自分を導いてくれるものとなります。

この「理想のおとな」を、自分がそうなることはできなくても、常にインスピレーションを与えてくれ、自分を後押ししてくれるものとして心に抱き続けられる限り、成長を続けることができるでしょう。このように生きている状態が結果的には「おとな」に見えるのではないでしょうか。

すると、子どもでも「おとな」だったり、大人なのに子どものままだったりする場合がけっこうあることがわかりますね。